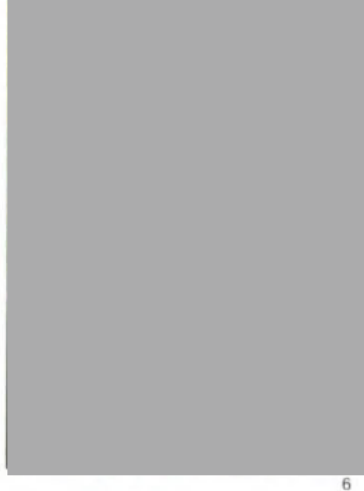
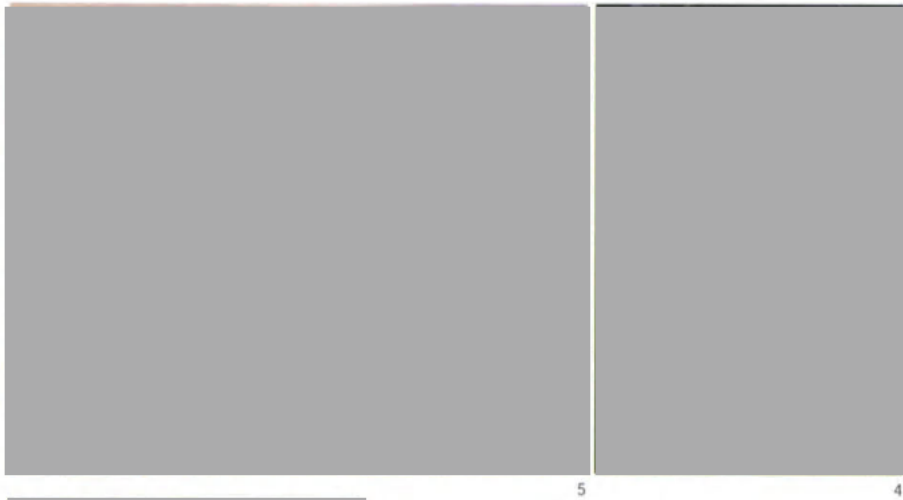


28 MIE PREFECTURAL ART MUSEUM NEWS HILLWIND

絵画はすこし分がわるい。詩のように情熱的な言葉も紡がず、音楽のように甘美な調べに酔わせることも、彫刻のように確固たる存在を主張することもない。突き詰めれば色と形、点と線、それらが黙して微笑むのみ。

古の大画家アペレスは、「絵では現せない事物」を描いたと評判をとる。雷鳴、電光、雷電。大地を揺るがす轟音、虚空を切り裂く閃光。人々はそれらにおののいた。不可能から可能への軽やかな反転には、想像力という名の魔法の杖がいる。絵の前に立つ私の胸の、奥で静かにそっと振られる杖が。(1y)



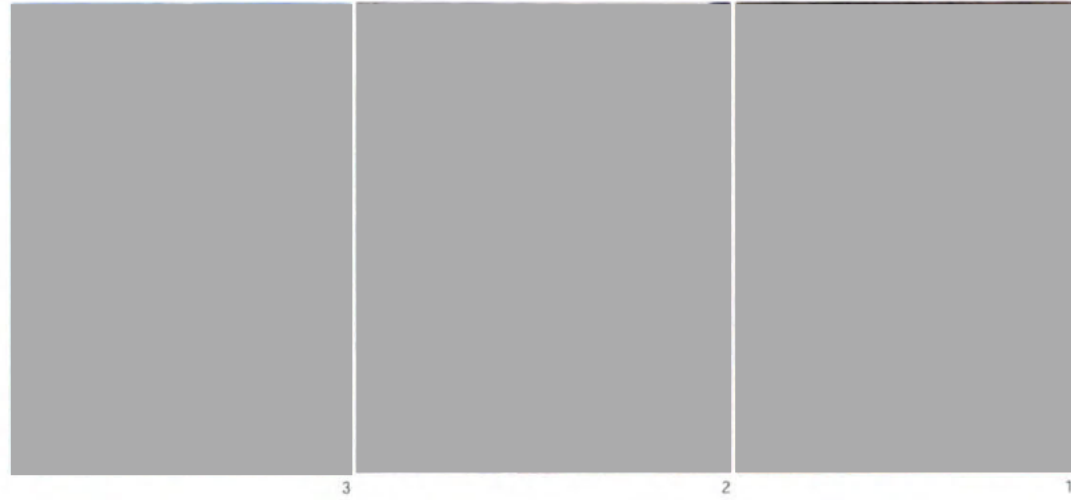
2011年9/10|土|-10/23|日|

1. 藤島武二《夢想》1904年 横須賀美術館蔵
2. 藤島武二《うつつ》1913年 東京国立近代美術館蔵
3. 藤島武二《室戸遠望》1935年 泉屋博古館分館蔵
4. 岡田三郎助《萩》1908年 兵庫県立美術館蔵
5. 岡田三郎助《支那絹の前》1920年 高島屋史料館蔵
6. 岡田三郎助《丹霞郷》1933年 個人蔵

今回の展覧会では、二人の個性の違いが如実にあらわれた女性像を中心に二人の画業を振り返りながら、互いにどのような影響を及ぼしあったのか、そしてそれぞれのめざした方向が彼らの活躍した時代に、どのように反映されていたのかを、資料等も交えてご紹介します。(LJ)

大正に入ると二人は本郷洋画研究所を設立。東京美術学校とあわせて後進の指導にあたり、制作の方面でも東洋と西洋の美術のはざまを振幅しながら清新な造形を追い求めました。そして黒田清輝の亡きあと、洋画界の重鎮的存在となりましたが、変わらぬ精力的な制作態度と広い視点で、若い世代からも信頼され、辛辣な批評家も彼らには一目置きました。

なりました。



藤島武二・岡田三郎助展

近代洋画史上、藤島武二と岡田三郎助は計り知れないほどの役割を果たしました。二人は明治の中期から昭和前期にかけて弛むことなく制作にまい進し、美術界全体の向上を考え、多くの後進を育てました。もしも彼らが登場していなかったならば、他の画家の秀作いくつかは生まれなかったかもしれません。

二人はその経歴においてあまりにも共通点が多いことで知られています。明治改元前後の年に九州で生まれ、洋画を学ぶために曾山幸彦という薩摩出身の画家のもとに入塾。明治24年にはともに美術団体である明治美術会に入会、その後フランスから帰国した黒田清輝や久米桂一郎と親交が深まり発表の場を彼らの創設した白馬会へ移しました。この親交を通じて二人の実力は認められ、明治29年には東京美術学校の助教授に就任。岡田はその翌年第1回の文部省留学生としてフランスに留学し、黒田の師でもあったラファエル・コランの指導を受けました。その一方で教育者としての経験があり(三重県尋常中学校で3年間教壇に立っていた)、東京美術学校からも頼りにされた藤島は、岡田よりも8年遅れてようやく留学が叶いました。古代に思いをはせた《天平の面影》やラファエル前派などからの影響を受けた《蝶》、そして与謝野晶子の歌集『みだれ髪』の装丁挿絵など、留学前すでにいくつもの代表作を生みだし、画家として自己のものを確立していた38歳の藤島はコラン以外の画家に師事することを選びました。しかも、藤島が留学したのは、パリではフォーヴィスムが産声を上げたちょうどその年にあたり、美術の大きな変革に触れることにも

2011年7月9日(土)―9月4日(日)

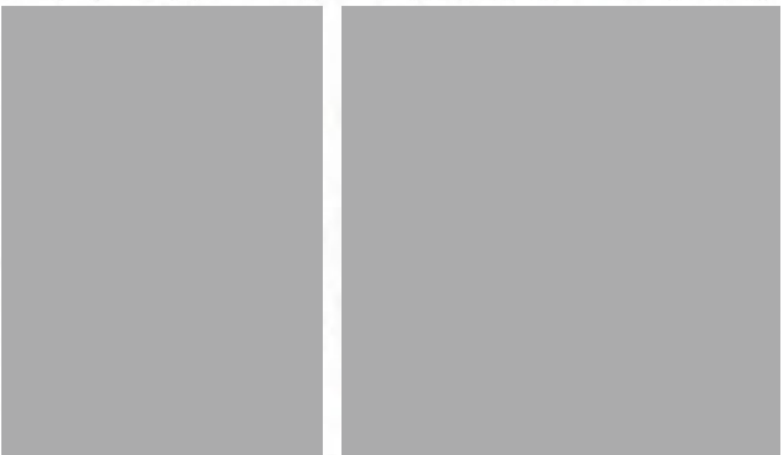
1986年末の時点で永井一正は、「日本の現役で活躍しているデザイナーは4世代に分けられる。第一の世代は亀倉雄策、早川良雄など、第二は田中一光・福田繁雄など、第三は石岡咲子・浅葉克己など、第四が戸田正寿や先に述べたサイトウ・マコトなどである。／第一、第二の世代は、作品に揺るぎのない造形性や、完成度の高さが見られ、作家性が強く打ち出されている。第三世代になるとその活躍の場がグラフィックデザインというよりも、広告のアートディレクションにおいて主に写真を媒介にしながら時代性を切りとっていく。第四の世代になると、少しまた様相が変わってきたという気がする」と記しました(「日本の若手デザイナーたち」、『アイデア』no.200、1987年1月号、p.152。なお「グラフィックデザイン」の黄昏、『アイデア』no.300、2003年9月号、pp.18-19。室賀清徳は、永井の一節を承ける形で、その後の展開について論じています)。

ちなみに、亀倉雄策(1915-97)・早川良雄(1917-2009)らの世代に対し、福田繁雄は杉浦康平と同じ19

32年生まれで、永井一正(1929-)や田中一光(1930-2002)の少し年下、横尾忠則(1936-)より少し年上となります。これに前史として、浮世絵を引

き継いだ明治のポスター、岡田三郎助(1869-1939)原画(1907)による三越のポスター(1909)；次回「藤島武二・岡田三郎助展」に出品予定)、明治末から大正期にかけての杉浦非水(1876-1965)・橋口五葉(1880-1921)らの登場、その間アール・ヌーヴォー、アール・デコ、あるいはパウハウスなどのモダン・デザインの流入を迎えつつ、さらに山名文夫(1897-1980)・河野鷹思(1906-99)など、戦前に活動を始めた作家たちの名前を並べてみれば、はなはだ大まかというほかありませんが、日本近現代のグラフィック・デザイン史に福田を位置づけるための手がかりとなりはしないでしょうか。

さて、そうした中で福田のデザインは、遊戯性と視覚トリックへの関心を大きな軸としています。むしろ、遊戯性・トリックと「揺るぎのない造形性」との一体化こそがその特質といえるでしょう。この点については、展覧会の現場でぜひ検討してみてください。(II)

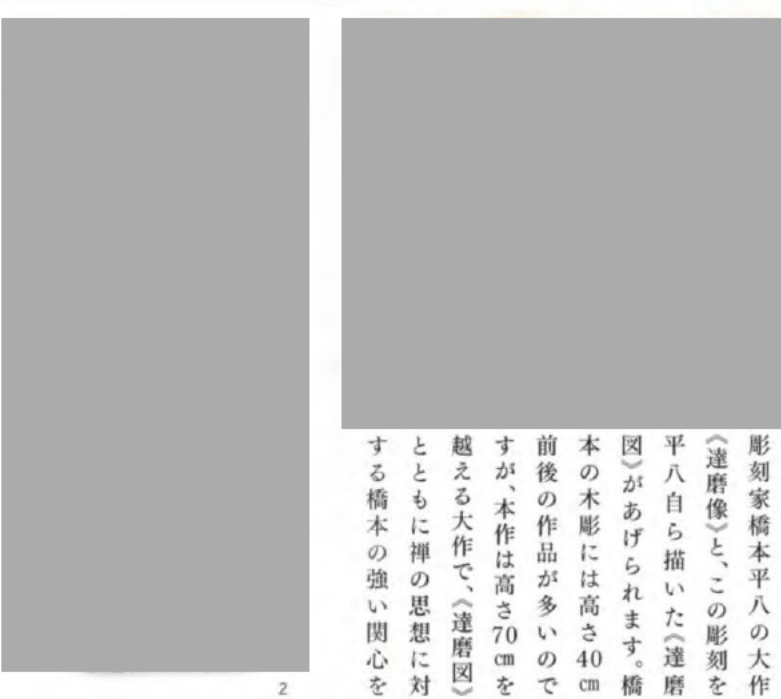


1

2

三重県立美術館では、毎年ささやかながらも作品購入を続けています。美術作品の購入は、贅沢で無駄なことと思われるかもしれませんが。しかし、美術館や博物館活動における作品購入は、私たちのアイデンティティを確認するとともに、歴史を形成していくという重要な意義を持っていると考えています。2010年度には、購入と寄贈あわせて9点の作品が収蔵されました。また、これとは別に、昨年10月に急逝された三重県伊賀市出身の書家榊莫山氏の遺作100余点について寄贈の手続きが進んでいます。

主な購入作品としては、先ず伊勢市出身で近年注目が集まっている彫刻家橋本平八の大作《達磨像》と、この彫刻を平八自ら描いた《達磨図》があげられます。橋本の木彫には高さ40cm前後の作品が多いのですが、本作は高さ70cmを越える大作で、《達磨図》とともに禅の思想に対する橋本の強い関心を



伝える作品でもあります。

現代の作品では、伊賀市出身の元永定正が1967年のニューヨーク滞在中に描いた大作《作品 Funny 79》、レンガ彫刻という新分野を開拓した彫刻家石井厚生(《時空・147》)があります。当館ではこれまでも元永定正の作品収集を行ってきましたが、ニューヨーク滞在中の数少ない元永作品がコレクションに加わった意味は大きいと思います。

この他にも八島正明(土間)(1975年)、村上光璋(輪)(1996年)、宮崎芳郎(群像)(1958年)ら三重ゆかりの作家の作品と、戦後の日本画界で活躍した福田豊四郎の初期作品《溪流》、手織錦と呼ばれる独自の染織芸術を確立した山鹿清華の《手織錦寿山舞鶴図屏風》(1943年頃)などの寄贈を受けました。こうした作品は、機会を捉えて皆様方にご紹介していきます。最後に、貴重な作品をご寄贈いただいた皆様に改めて御礼申し上げます。(MI)

2

今年度から三重県立美術館に勤めることになりました鈴木麻里子です。高校生までは三重県のお隣の愛知県で過ごしており、またしたので、こうして再び東海地方に戻り、この地で職を得ることができてうれしく思っております。当館では、主として教育普及活動に携わることになります。

学生時代は、19世紀フランスの画家ピエール・ピュヴィ・ド・シャヴァンヌ(1824-1898)の作品について学んでおりました。彼が描いた時の止まったような楽園に憧れを抱き、穏やかに典雅な作風に安らぎを覚え、作品の制作過程や制作目的等を調べる日々を送っていました。まさに、せわしない東京の日常や厳しい現実から逃れ、ほっ



1

と息つくには恰好の画家であったと言えます。残念ながら、彼の代表作の大半を占めるのが壁画であるため、現地に赴かなければ目にすることのできないものも多いですが、国内にも数そのものは少ないながら優品が存在します。今日では決して有名画家の上位に名を連ねることはありませんが、かつては美術界の大家として名を馳せ、日本人画家たちにも少なからず影響を及ぼしたことが知られています。

私自身はこれまで専門的に教育を学んだ経験はありませんが、中学時代の総合学習から大学院時代のインターンに至るまで、美術館のスタッフの方々には幾度となくお世話になってき

たため、美術館の教育普及活動に関しては並々ならぬ思いがありますし、この道に導いてくれたことに対し恩義を感じています。来館した子どもや学生たちを見るにつけ、どうして自分がこの道を志したのか、原点に立ちかえって考えさせられ、身のひきしまる思いがしています。

勤務するようになってまだ日が浅く、仕事の要領もつかめず右往左往しておりますが、試行錯誤を繰り返しながらも日々精進していきたいと思っております。どうぞ暖かい目で見守ってください。よろしくお願いたします。(Sm)



2

1 リヨン美術館の階段室 ピュヴィドシャヴァンヌ
左から

《古代のヴィジョン》(部分)、
《建築とミュージックたちの聖なる森》、

《キリスト教の霊感》(部分) 1884年-1886年

2 ルーアン美術館階段室の壁画 ピュヴィドシャヴァンヌ
《芸術と自然の間》(部分) 1890年

三重県立美術館友の会へのお誘い

友の会は三重県立美術館を支える団体として活動しています。研修旅行、美術講演会、懇談会など、会員同士の楽しい交流や美術の教養を深める催しに参加できます。

■年会費

一般会員：3,000円 入会金：500円

ペア会員：5,000円 入会金：1,000円

■特典

会員鑑賞券配付、観覧料半額、美術館に関する情報提供のほか、レストラン、ミュージアムショップのご利用にも割引があります。詳細は、三重県立美術館友の会事務局(TEL 059-227-2232)までお問い合わせください。

財団法人 三重県立美術館協力会 賛助会員へのお誘い

美術館の調査・研究事業補助、カタログなど美術資料の作成頒布、鑑賞団体への援助など、美術館活動活性化のための事業をおこなっています。協力会の主旨にご賛同いただき、賛助会員へのご加入をお願いします。

■会費

年間一口

個人：25,000円 法人：50,000円

準会員：10,000円

■特典

展覧会ならびにレセプションへの招待、各展覧会毎のカタログ贈呈や美術館活動に関する情報提供などの特典があります。詳細は三重県立美術館協力会事務局(TEL 059-227-1117)までお問い合わせください。

展覧会スケジュール

■企画展示

ユーモアのすすめ 福田茂雄大回顧展

2011年7月9日[土] - 9月4日[日]

観覧料: 一般 800(600)円

高大生 600(400)円

小中生無料

()内は20名以上の団体料金

●講演会「福田先生から受け継ぐもの」

講師: 松下計(デザイナー、東京芸術大学准教授)

日時: 8月20日[土] 午後2時から(1時間30分程度)

場所: 美術館講堂 ※参加無料

●ギャラリートーク

日時: 7月23日[土]、8月13日[土]

いずれも午後2時から

※参加ご希望の方は、企画展入口にお集まりください。

展覧会観覧券が必要です。

藤島武二・岡田三郎助展

2011年9月10日[土] - 10月23日[日]

観覧料: 一般 900(700)円

高大生 700(500)円

小中生 400(300)円

()内は20名以上の団体料金および前売料金

■常設展示

美術館のコレクション

【2011年度 第II期】

2011年6月28日[火] - 9月25日[日]

柳原義達記念館 柳原義達の芸術

【2011年度 第II期】

2011年6月28日[火] - 9月25日[日]

■メールマガジン 購読料無料

三重県立美術館の最新情報をみなさんのパソコン、携帯電話へお届けします。詳しくは、美術館ホームページをご覧ください。

利用のご案内

■開館時間

午前9時30分 - 午後5時(入館は午後4時30分まで)

■休館日

月曜日(祝日休日にあたる場合は開館、翌日閉館)[7月19日(火)、9月20日(火)、10月11日(火)、2012年1月10日(火)]
年末年始[2011年12月29日(木)から2012年1月3日(火)まで]

■観覧料

【常設展示の場合】

〈美術館のコレクション+柳原義達記念館〉

一般 300(240)円

高大生 200(160)円

65歳以上の方、小・中生 無料 ()内は20人以上の団体料金

【企画展示の場合】

その都度定めます。

ただし、学校の教育活動として小・中・高・特別支援学校等の団体が観覧する場合、身体障害者手帳等をお持ちの方および付き添いの方1名が観覧する場合は無料。

■交通

津駅(近鉄・JR線)西口より徒歩約10分または、循環津駅西口(つつじが丘、むつみが丘経由)行き、総合文化センター行き2分、美術館前下車 ※できる限り公共交通機関をご利用ください。



三重県立美術館 〒514-0007 津市大谷町11

Tel: 059-227-2100 Fax: 059-223-0570 <http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/>



三重県立美術館ニュース「HILL WIND」No.28

■発行日: 2011年3月10日(禁・無断転載) ■企画・編集・発行: 三重県立美術館 ■原稿末尾のイニシャルについては以下のとおり: 毛利伊知郎(Mi) 石崎勝基(Ik) 生田ゆき(Iy) 鈴木麻里子(Sm) 田中善明(Ty) ■デザイン: 豊永政史
■表紙の作品: 右: 藤島武二《女の横顔》1926-27年/左: 岡田三郎助《あやめの衣》1927年 いずれもポーラ美術館(ポーラ・コレクション)

HILL WIND, no.28 正誤表

裏表紙 左欄 3 行目

「福田茂雄」 → 「福田繁雄」

裏表紙 下から 3 行目

「3 月 10 日」 → 「8 月 10 日」

藤島武二・岡田三郎助展のページ

図 5 ← → 図 6 (入れ替わっています)